

青森・八戸 縄文の郷 「是川」に 縄文文化を代表する是川遺跡・風張遺跡を訪ねる

【参考】資料による是川遺跡・風張遺跡概要

1. 是川遺跡 概要

資料抜粋まとめのベース資料

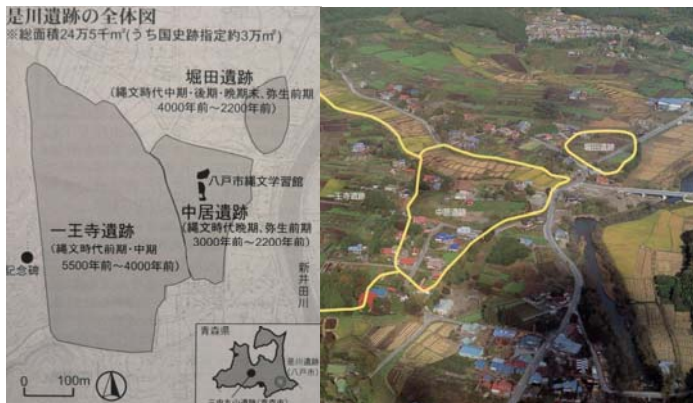
1. 東奥日報 HP「是川遺跡」 <http://www.toonippo.co.jp/kikaku/korekawa/index.html>
2. 縄文ファイル 2003.6.1.「是川遺跡 伝わってくる縄文人の豊かな感性」小久保卓也
3. 「八戸市 是川中居遺跡 平成14年の発掘調査から」小久保卓也
青森市 平成14年縄文講座「縄文人の台所・水さらし場を考える」より
4. 「是川中居遺跡 平成16年度発掘調査」平成16年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会 資料より



縄文の里 是川 是川遺跡 & 風張遺跡



是川遺跡の位置と 10. 30. 是川遺跡 walk 行程図



是川遺跡は、八戸市の市街中心部から南へ約4キロ離れた所に位置し、新井田川左岸の台地に広がる縄文を代表する遺跡。特に卓越した赤漆塗りの漆工芸技術を示す植物性遺物(弓、櫛、腕輪、藍胎漆器などの木工品類ほか)や土器などは川遺跡の中心遺跡中居遺跡から出土し4000点をこえる出土遺物は工芸的にも優れ、「縄文の漆」を代表する遺跡として全国的に注目される。

是川遺跡の広さは東京ドーム5個分に当たる約245,000㎡で、縄文時代晩期の亀ヶ岡文化を中心とする中居遺跡＝約45,000㎡、縄文時代前期－中期の一王寺遺跡＝約18,900㎡、縄文時代中期の堀田遺跡＝約1,100㎡の三つの遺跡を総称して是川遺跡と呼ぶ。

新田川は、岩手県北部北上山地に源をもち、北流して八戸市で太平洋に注ぐ。遺跡は、その谷あい、現在の河口から7kmほど遡ったところにあり、遺跡は全体が新井田川左岸の低い段丘の上のっている。また、新井田川をはさんで対岸、是川遺跡から500mのところには縄文後期の集落遺跡で、合掌する土偶が出土したことで有名になった風張遺跡がある。



1. 中居遺跡 縄文時代晩期の3000年前から3200年前の遺跡



漆塗りの木製品など優れた遺物が良好な状態で多数出土し、縄文時代晩期の代表的な遺跡である中居遺跡は、標高10-20メートルの緩やかに傾斜する段丘に位置する。

中居遺跡は1920年(大正9年) 土地の所有者で八戸在住の素封家泉山岩次郎・斐次郎氏の両氏によって 最初の発掘が行われた。1926(大正15)年には、特殊泥炭層が発見され、そこから多量の土器をはじめ普通の遺跡からはほとんど発見されない植物質の遺物(へら形木製品や漆塗りに腕輪など)がまとまって見つかった。

木製品などの植物性遺物は、通常は地中で腐ってしまうが、ここでは水につかった状態の泥土が「天然の冷蔵庫」の役割を果たしたことで、腐らずに残っていた。その後も赤漆塗りの弓、木刀状の木製品、藍胎漆器などが相次いで出土。

卓越した赤漆塗りの漆工芸技術を示す植物性遺物(弓、櫛、腕輪、藍胎漆器などの木工品類ほか)や土器など4000点をこえる出土遺物は工芸的にも優れ、縄文時代の技術「縄文の漆」を代表するものである。

出土遺物の特徴をまとめると次のとおり。

1. 「土器の種類、形態が多種多様。用途に応じ機能的で、完形品が多い」
2. 「植物性遺物が多く、特に飾り太刀、弓、くしなど赤く彩色された優れた工芸品が多い」
3. 「漆工芸技術が高度に発達していたことを示す藍胎(らんたい)漆器や土器が見られる」
4. 「土器、土偶などの造形、文様構成、表現方法が計画的で大胆、繊細。熟練した手法で精巧に作られたものが多い」

遺跡から発見された数々の出土遺物は泉山岩次郎・斐次郎氏の両氏などの努力により散逸することなく守られ、その後 縄文時代の技術「縄文の漆」を代表する遺物として全国的に注目され、1962(昭和 37)年に 633 点が国の重要文化財に指定された。

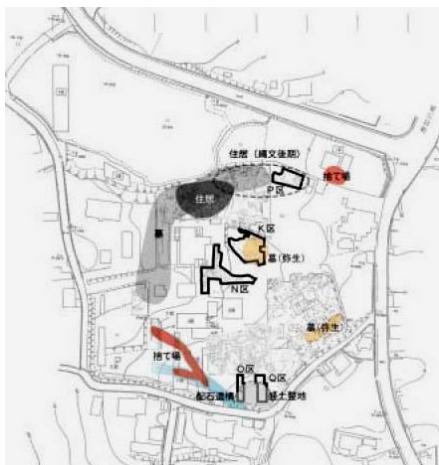
また、1929(昭和 4)年には東京の大山史前学(しぜんがく)研究所が本格的な学術調査を実施し、泥炭層のたい積状態が詳しく記録され、遺物も土器や石器、植物遺存体のほかに、鹿やイノシシなどの骨や貝類などの動物遺存体も出土することが分かった。

● 戦後は、遺跡に公共施設や道路が造られるのに伴い発掘調査が行われるようになった。

1974(昭和 49)年には、北西側の高い部分から縄文後期の墓坑が発見され、赤い顔料が付いた人骨がみられるものもあった。墓坑は 1993(平成 5)年に縄文学習館を建設する際にも多数見つかリ、その東側からは縄文後期一晩期の竪穴住居も検出された。そのほか、1980(昭和 55)年の遺跡東端の発掘調査では、縄文晩期終末から弥生前期の遺物が発見され、西日本の弥生文化に由来する「遠賀川(おんががわ)系土器」も出土した。

1999 年(平成 11 年)から さらに公共施設や道路建設に伴い、是川遺跡の範囲・内容確認を目的に中居地区・長沢地区を中心に発掘調査が開始され、漆塗りの木製品や大型木柱、植物を編んでつくった網代(あじろ)など貴重な遺物が多数出土すると共に新しい発見も相次ぎ、是川遺跡の中心である中居遺跡の集落としての性格も明らかになってきた。

● 中居遺跡 平成 16 年度 2003 年 調査報告より 最近の発掘調査要約



遺構の種類

- 竪穴住居跡…縄文後期中葉 4 棟 (P 区)
- 土坑墓…弥生時代前期 17 基 (K 区)
- 土器棺墓…弥生時代前期 2 基 (K 区)
- フラスコ状土坑…縄文時代中期 1 基 (N 区)
- 配石遺構…縄文時代晩期以降 2 基 (K 区・O 区)
- 溝跡…弥生時代? 1 条 (N 区)
- 盛土整地跡 (O 区・Q 区)

遺物の種類

- 縄文時代…中期の土器、後期中葉～晩期後葉の土器、土製品、石器、石製品が出土。
- 弥生時代…前期の土器、石器、石製品が出土。
- 近世…陶磁器が若干出土。

遺跡の特徴及び注目される遺物

遺跡北側の P 区からは縄文時代後期中葉の住居跡がみつかリ、住居のまとまりが見えてきました。「南の沢」の東に設定した O・Q 区では、沢に向かって傾斜している地形を盛土して整地し、配石遺構などを作っていたことが分かりました。遺跡南西の弥生前期のお墓のほかにも、中央の K 区から、同じ時期の楕円形の土坑墓や土器棺墓が見つかりました。土坑墓のひとつから玉 61 点と石鏃 3 点が一緒に出てきました。

中居遺跡 2003年度 調査地区と発掘遺構 まとめ

1. 遺跡の南側には深さ2m以上の2本の沢が東西方向に伸び、現在はなだらかな傾斜地であるが、当時は起伏のある地形で、数多くの植物質遺物が出土する特殊泥炭層はこの沢を埋めるように広がり、その窪地に縄文晩期はじめの生活道具や食料残滓が捨てられていた。食料としてのトチ・クルミの殻は一番多いところで約80cmの厚さに積もっていた。
また、遺跡の北側 長沢地区にも河川の跡が見つかり、遺跡北側にも 大量の遺物が捨てられていることが、わかった。
2. 遺跡中央の台地部分には縄文時代後期から晩期の住居跡赤く塗られた人骨が埋葬されていたお墓が作られていた。
3. 遺跡西側には 弥生時代前期の竪穴住居や砂沢式の甕を使った土器棺墓が作られ、遠賀川時がまとまって出土。
このことから、中居遺跡は弥生時代に入っても中心的な集落だったかも知れない。

1999-2002年度の調査 まとめ

2002年度までの調査の結果、遺跡の南側には、深さ2m以上の2本の沢が東西方向にのびており、起伏のある地形だったことが分った。泥炭層はこの沢を埋めるように広がっており、その窪地に縄文時代晩期初め(約3,000年前)の生活道具や食料残滓が大量に捨てられている。食料としたトチ・クルミの殻は一番多いところで約80cmの厚さに積み重なっている。

[中居遺跡 1999-2002年度 調査]



- A区 近代以降らしい家屋の柱穴、ゴミ穴が多数見つかった。(1999年度調査)
- B区 A区の東側で、その東端部は史跡指定地にかかっている。配石構造の一部、周囲から弥生前期の砂沢式土器を配石構造の一部、周囲から弥生前期の砂沢式土器を得ている。(1999年度)
- C区 (南北25m・東西3m) 平成5年に八戸市教育委員会が試掘調査をした場所で、その時厚さが少なくとも30cmある堅果類中心の植物遺体層を確認。D区と同じような状況の遺物の捨て場を検出。調査区を南側に延長し、新たに地形が落ち込んでいることが判明し、その部分も遺物の捨て場。(2000年度)
- D区 (南北25m・東西3m) 南端が湿地帯で昭和3(1922)年の大山史前学研究所の調査区に隣接した所である。木製品、土器、石器等が多量に投げ捨てられてきた縄文時代晩期前葉の遺物包含層が見つかる。沢地が遺物の捨て場(1999年度)
- E区 (約9m²) 花粉分析資料のための小規模な調査区。晩期中葉の土器確認(2000年度)
- F区 (約140m²) C区で発見した北側の沢および捨て場の延長を確認した。捨て場から縄文時代晩期前葉と見られる大量の土器が見つかった。またC区で発見した植物遺体層は発見されなかったため、C区とF区との間で植物遺体層は途切れている考えられる。(2002年度)
- G区 (約2000m²) 中期末、弥生前期と考えられる竪穴住居跡や埋設土器、土器、石製品などが出土。(2002年度)
- H区 (約96m²) 沢と泥炭層確認のための調査。南の沢の幅は8~9mと推測される。沢に平行して人為的な溝も確認された。また、赤漆塗りの「弓」や「腕輪」、「編み物」「サメの骨椎骨」など出土。(2002年度)
- I区 (約150m²) 1974年に調査された場所。当時は、後期・晩期の墓4基と人骨8体が確認されている。今回の調査では、墓2基などが出土している。(2002年度)

2. 平成14年度の発掘調査の概要

① G区の調査

G区では縄文時代中期のフラスコ状土坑が3基、弥生時代前期初頭の住居跡2棟、埋設土器4基、土器集中地点が10ヶ所、古代の竪穴住居跡3棟、江戸時代の掘建柱建物跡などが検出されたが、縄文晩期の遺物や遺構は検出しなかった。

② I区の調査

I区の調査区の東側では、昭和49年の調査により縄文時代後・晩期の土坑墓4基と赤色顔料で赤く染まった人骨が8体確認されており、今回の調査でも土坑墓は11基見つかり、墓域が西に広がることが確認された。土坑墓の1基からは赤色顔料と粉状になった骨の下から土製の耳飾りが2点出土した。ほかに、縄文時代晩期初め(大洞BC式)の壺や鉢などがまとまって出土した土坑や縄文時代中期末から後期初頭の住居跡や近世の竪穴遺構などを検出した。

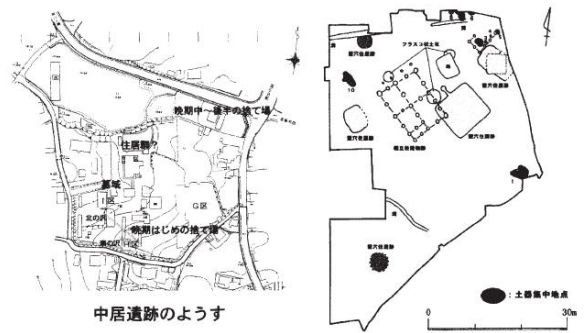
③ H区の調査(水場遺構と思われる遺構の検出)

H区は「南の沢」を埋めている泥炭層の調査である。C区(平成12年度調査)で確認した「南の沢」からは赤漆塗りの木胎漆器や多数の木製品が出土したが、沢の全幅はつかめず調査を終了した。そのためH区はC区の南側に重ねるように設定し、沢幅の調査と合わせ、泥炭層の調査も目的として行った。調査の結果、沢は一番深い場所地表から約3.5m、幅9mほどであり、沢を埋める泥炭層からは、縄文晩期初めの土器や石器と共に、赤漆塗りの櫛・弓・腕輪や樹皮製品、藍胎漆器や撚り紐、籠状の編物や筒状木製品のほか、1,000点を超える加工木材が出土した。

さらに沢を渡った南岸には、沢と平行する溝が3条検出された。また長さ4.2mを超える木柱や、壁材と考えられる木組みのほか、沢の南岸付近には連続して7本打ち込まれた杭を検出した。溝は出土遺物から晩期のものと考えられ底面には砂の堆積が見られた。溝が掘られたころの沢地は、すでに埋没し泥炭が発達していたと考えられるため、水を迂回させるための導水路のような施設と考えられる。また7本の杭列は沢の南岸付近に並んでおり、沢を埋めている湿地に手を加えていた一種の水場遺構と考えられる。水場遺構を検出した沢の調査は完了していないため、H区は来年度も調査する予定であり、遺構の性格などは今後の調査に期待したい。

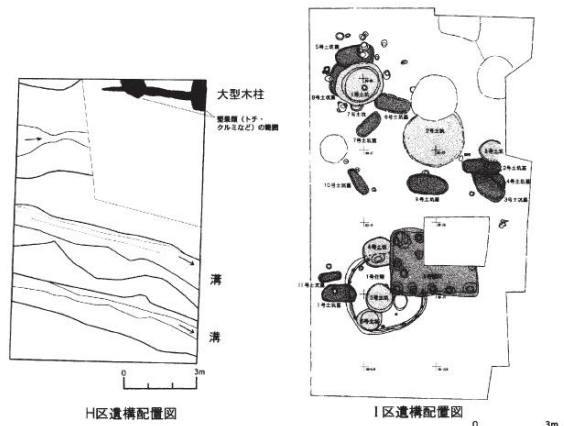
3. 出土遺物

注目の遺物として、H区泥炭層から出土した漆塗りの大型樹皮製容器があげられる。同じものと思われる多数の破片のほかに、もう1点、大型樹皮製容器が出土している。遺物は長さ40cm、幅30cm、厚さ3mmと大型で、樹皮に赤・黒の漆を重ね塗りしたもので、端の部分には約3cmの等間隔で孔が開けられ、その孔から3本のひもが放射状に伸びている。全体の形は不明だが、3本のひもで他の部品と結合させるといった、繊細なつくりが注目される。もう1点の大型樹皮製容器の端には、黒地の漆に赤漆で半円状の文様が連続して描かれており、同じ様に等間隔に孔が開けられている。このほかにも弧状に文様が描かれたものや浅い溝が彫りこまれた破片などが見つかっており、縄文晩期の木工・漆技術の高さを改めて感じさせられた。



中居遺跡のようす

G区遺構配置図



H区遺構配置図

I区遺構配置図

図1 遺構配置図等



漆塗り器材の出土について一平成14(2002)年秋出土。高さ28cm、厚さ2~6cm、底径と膨らむ部分の厚さ6cm、底定径(直径として)43cm、蓋径と膨らむ部分の厚さ2~3cm、底定径68(直径として)cm。このほかにも膨らむ部分に刻まれた文様のものも出土している。



漆塗り樹皮製容器出土状況



2. 一王寺遺跡 縄文前期-中期の遺跡



中居遺跡の西側の台地一帯に位置する。1926(大正 15)年に東北大学の長谷部言人(はせべ・ことんど)、山内清男両氏が発掘調査を行い、バケツ形の土器を多数発見した。これらは縄文前期-後期の土器だったが、これがきっかけとなって現在の「円筒土器」という名称が生まれた。

1929(昭和 4)年には大山史前学研究所の発掘調査で、円筒土器の層が厚さ 1m から 1.5m もあることや、土器とともに獣骨や魚骨、骨角器(こっかくぎ)が出土したことが報告された。最近では八戸市教委が 1994(平成 6)年から 1998(平成 10)年まで試掘調査を行い、縄文前期・中期の遺構や遺物のほかに、縄文晩期初めの竪穴住居や晩期後半の土器などが確認された。

3. 堀田遺跡 縄文時代中期の遺跡



中居遺跡の北側の台地の先端部に位置し、東側には新井田川が流れる。1932(昭和 7)年にたまたま縄文時代の竪穴住居が見つかり、付近から宋銭(景德元宝)が出土した。

当時は、東北北部の縄文時代がいつまで続いていたのかということについて研究者の意見が分かれていたが、このうち喜田貞吉氏は堀田遺跡などの宋銭を手がかりにして「東北北部では、金属器が使われる平安時代末期まで縄文時代の生活が続いていた」と主張。1936(昭和 11)年に、「縄文の終末年代が地方によって大きく違うことはない」とする山内清男氏との間で、縄文時代の終末をめぐる考古学

史上有名な論争(ミネルヴァ論争)を繰り広げた。戦後になると、道路工事に伴う発掘調査を八戸市教委が実施。

1972(昭和 47)年には縄文中期の竪穴住居、1980(昭和 55)年には縄文中期の土坑(どこう)や弥生前期の土器が発見された。弥生土器の中には糲(もみ)痕がついたものも見つかった。



是川中居遺跡の出土品



発掘写真

泥炭層が堆積しており、ここから土器とともに多くの植物質遺物が出土しました。木製の弓、飾り太刀、筒形木製品、腕輪、櫛、耳飾りなどをはじめカゴを芯に漆で塗り固めた藍胎漆器や、木地を削りぬいて作った鉢や高杯などの容器類があります。また藁類の繊維を使った編み物なども出土しています。出土品の中には赤色の顔料を混ぜた漆を塗り、美しく仕上げたものも多く、複雑な漆工芸の技術も使いこなしていたことがわかります。

中居遺跡出土品	
縄文式土器	1,688
土製品	255
石器	1,924
骨角器	4
木器等植物質製品	78
自然遺物	19
土師器	8
計	4,006
一王寺遺跡出土品	
円筒式土器	20
土 俵	3
骨角器	100
自然遺物	25
計	149
中居遺跡出土品	4,006
一王寺遺跡出土品	149
その他各地出土品	323
合 計	5,078



八戸 是川遺跡・風張遺跡全景
2008. 10. 31.

縄文の漆工芸 是川遺跡



漆の入った土器



赤色顔料の入った土器



腕輪



飾り太刀柄頭



藍胎漆器



弓の断片



壺形土器



壺形土器



注口土器

縄文の漆工芸

縄文時代の人々は容器（土器）や道具（弓）、装身具（耳飾）などの多くを赤色漆や黒色漆の彩色や文様で飾りました。是川中居遺跡からは多数の漆製品が出土しています。

漆工芸は、漆液の採取、生漆の精製、顔料の添加、素地の製作、塗装、乾燥という一連の複雑な工程を必要とするものですが、縄文人はこうした作業工程をみごとにこなし、縄文文化を華ひらせています。



採取のためきざみを入れた木



こし紙による髹塗



漆塗り作業



漆の入った土器

是川中居遺跡の土器



遺跡からは、縄文時代晩期の土器が多量に出土しています。壺形土器、鉢形土器、注口土器、台付土器など、器の種類が多く、繊細な文様をもち精巧な造りの土器が多いのが特徴です。赤漆で美しく彩色されたものもあります。これらの土器のほとんどは、亀ヶ岡式土器と呼ばれているものです。



是川遺跡の土偶



参考 是川中居遺跡の漆工芸 「是川遺跡を中心にして北東北の縄文について」
2008年9月6日青森県八戸市7日岩手県久慈市で開催されたえみし学会
「第19回 えみし文化ゼミナール」講演

……小林和彦是川縄文学習館館長

<http://www.jomon.com/~emisi/semi/19semi/resume/kobayashi/kobayashi.htm> より

是川中居遺跡の発見の中で特筆すべきはやはり漆工芸で、植物質製品はもとより、漆工品についてもわが国ではじめてまとまって出土した遺跡でもある。数多くの製品と製作に関わったと考えられる要具類がある。

泉山氏のコレクションには、漆塗リ木製容器、籃胎漆器、彩文のある樹皮製容器、漆塗リ弓、飾り太刀、赤色漆塗リ櫛、赤色漆塗リ耳飾り、漆塗リ腕輪、漆塗リの土器がある。植物質製品は縄文晩期前葉のもので、漆塗リ土器はその時期を中心に晩期後葉（～大洞A式）のものまで出土している。

木製容器は、赤色漆塗リ鉢、壺、高杯など、それぞれ比較的小形のものが残されている。高杯は透かしのある高台の上に浅い鉢がのるもので、なかには胴部外側に渦巻き文様を浮き彫り風に彫刻し、口縁部に1個小さな突起が削りだされているものがある。かなり薄手に削りだされた精巧なもので、黒い漆を下地に、光沢を持った赤色漆がしっかりと塗られている。最近の素材調査で、トチノキが使われていることがわかった。トチノキは現在の漆器製作においても、優良な素材として、椀や盆の木地として盛んに使われている。縄文時代の人びとも、樹種による木材の性質の違いを熟知して素材を選択していたのである。

籃胎漆器は、かごを芯に漆で塗り固めたもので、ここには鉢と壺がある。鉢は、方形の底と柔らかく膨らむ胴をもつ。母胎となるかごは、底を幅広の材料で網代編みし、胴は経・緯とも太さ1mm内外の素材を用いて細密に編み上げている。全体にかなり薄手に作られており、塗装部分を含めても厚さは2mm程度。かごの編み目を埋めるためにパテのように使われている下地は、漆に植物質の粉末を混ぜ合わせた、現在の漆工で木屎漆と呼ばれるものに近いものが使われているらしい。上塗りに使われている赤色漆は、おそらくベンガラを混ぜたもので、落ち着いた美しい発色になっている。



弓は、泉山氏の発掘品には5張ある。いずれも自然木から作り出された丸木弓であり、1張は白木弓、残りは漆塗りの弓である。今回出品の弓は、赤色漆塗りで、細かく破損しているが、接合してほぼ完全な形に復元されている。長さは約130cm。断面形はやや扁平で、細身、華奢なつくりの弓である。一方の弭はヒョウタン形のこぶを削り出している。黒色漆で下地をしてから、4本1単位を基本に一定の間隔をあげ所々に樹皮（サクラ類）を巻きつけて、補強と装飾の効果を上げている。その上から全体に厚く赤色漆を塗っている。

飾り太刀は、鞘に収められた太刀の形を連想させる木製品である。柄の両端を球状に削り出し、渦巻き風の文様を彫刻している。鞘にあたる部分は扁平で、刃および棟に相当する両側には、何かが埋め込まれていたような小さな穴が連続して開けられている。彫刻などは精緻で力強く、厚く塗られた赤色漆も鮮やかで、華やかで堂々とした造形である。この木製品は、1928年（昭和3）9月の発掘によって出土したことが泉山斐次郎氏邸に保管されてきた氏のノートによってわかる。

赤色漆塗リ櫛は6点ある。いずれも結歯式の竖櫛で、櫛歯は欠落して、棟だけの資料である。棟に残された歯が脱落した跡を見ると、歯が丸棒であったこと、歯の数が8～9本であったことなどがわかる。棟の形は半円形のもの、2つの角のような突起を持ち透かし穴を開けたものなどがある。耳飾りは滑車形で、土製のものと木製のものとがある。木製の耳飾りはいずれも赤色漆を塗って仕上げている。短い円筒の両側をやや外側に開かせた形で、装着したときに正面を向く側をより大きく開かせて装飾的な彫刻を施している。大きさは直径1cm～3cmである。

漆塗り腕輪は、今回 5 点出品されている。1 点は土製で、他は木製である。木製のは蔓性の弾力のある植物を輪にして漆で固めたもので、下地に黒色漆を塗り、その上に赤色漆を塗っている。土製の腕輪は、黒色漆の下地に赤色漆で半円形を連ねた文様を描いている。

漆塗りの土器(今回 5 点出品)は、壺を中心に浅鉢、台付土器、注口土器などに見られる。基本的には赤色漆一色で全体を塗っており、塗り分けによって文様を描いたものはない。黒色の漆で下地を施し、赤色漆を 1 回塗りする機会が多く、土器に赤色漆を直接 1 回塗って仕上げていることもある。厚くしっかりと塗られて、漆特有の落ち着いた光沢を留めている漆塗り土器も、何回も塗り重ねを行っている訳ではない。ここには、数少ない工程で上質の仕上がりを得る、技術の確かさがある。



要具類には、漆を入れた土器、赤色顔料を粉碎調整するのに使われた石皿、赤色顔料を入れた壺形土器などがある。漆を入れた土器には壺、鉢、深鉢、台付鉢などがある。ウルシの木からの漆の採取、運搬、精製、塗装作業など、さまざまな工程に使われた漆の容器である。他の用途の土器が破損したものを転用して使ったものがある一方で、文様のない粗製の小形深鉢のように、漆容器として使うために作られたと考えられる専用の土器もある。赤色漆を作り出すために使われた顔料には、ベンガラ(酸化第二鉄)と水銀朱(硫化水銀)とがある。中居遺跡からはこれらの顔料がそれぞれ壺の中に保管された状態で発見されている。

これらの中居遺跡の漆関係資料はすべて 1920 年代に出土したもので、その量の多さ、種類の多さ、石器時代のものとは考えられないほど洗練された技術の存在など、当時は他にほとんど類例のない発見として注目された。その後 1950 年頃から各地で低湿地遺跡の発掘調査が行われる機会が多くなり、それに伴って漆工関係の資料も増加してきた。

現在では、縄文時代の漆工芸は前期段階にはすでに北海道南部、東北、関東、北陸から山陰地方までの広い範囲で確認されており、それ以降の各時期、それぞれの地域での発見によって、縄文文化のなかに漆工技術が定着している様子が、明らかになっている。

漆工芸は縄文社会に広く普及していた普遍的な技術であった。

是川中居遺跡の出土品は、その縄文漆の実態を明らかにするうえで重要な役割を果たしてきた。

1999 年からは是川遺跡整備事業の一環として、低湿地部分の発掘調査が行われ、漆漉し布として使われたアングインなど、新しい注目すべき発見が相次いだ。低湿地における現在の考古学的な水準での調査が進むことによって、70~80 年前の泉山氏のコレクションについての理解もさらに深まることが期待されている。

[参考] 資料による是川遺跡・風張遺跡概要

2. 縄文後期の環状集落 是川風張遺跡 概要

資料抜粋まとめのベース資料 「風張遺跡の縄文社会」 特別展 八戸市博物館 より抜書き

- 合掌する土偶
- 広場を取り囲む竪穴住居の環状集落
- 3500年前 縄文時代後期に東北の最北端で「炭化米」が2粒出土した 稲作の出現に一石を投じる



合掌する土偶 腕組する土偶
八戸是川・風張遺跡出土 土偶

風張1遺跡は、八戸市中心部から南へ 4.2kmの新井田川下流域右岸で、縄文時代晩期の遺跡として有名な是川遺跡の対岸に位置する。昭和63年から平成4年までの5か年にわたり発掘調査が行われ、昭和縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡で、その大半は縄文時代後期後半(今から約3500~3000年前)であることがわかった。

現在、この地には老人ホームが建てられている。

検出遺構はこれまで、竪穴住居跡280棟 竪穴遺構3棟 掘立柱建物20棟 土坑1662基 土コウ墓127基 奥外炉34基 集石遺構3基 埋設土器2基 溝跡4条 環濠1重 溝状ピット3基が、中央部の緩傾斜地を中心に、時代によって先端部にかけての緩傾斜地に広がっている。

- 縄文早期・中期には中央部の緩傾斜地が選択され、
- 後期には前半期先端部高台から最先端部にかけての狭長な緩傾斜地
- 後半期にはもとの中央部の緩傾斜地が選択されている。
- 弥生時代には縄文後期後半期の占地と重複。古代には弥生時代・縄文後期後半期の占地と重複するが、さらに突端側への広がりが見られる。

これらの遺構は縄文・弥生・奈良・平安の各時代に集落を営んでいた複合集落であるが、縄文後期後半の遺構が最も多く検出されている。

そして、墓域を中心とした規則性のある環状集落の形態を示している。

● 縄文後期後半の環濠集落

集落は東西126m 南北105mまで確認されているが、多少東西に調査域外まで広がると予想されている。

調査した遺構の中で、この集落に係わりがあるのは竪穴住居跡184棟

掘立柱建物19棟 土坑1367基以上 土コウ墓127基 奥外炉4基以上などと考えられている。

中心部に2ヶ所の墓域が設けられ、それを取り囲むように土坑・掘立柱建物 そして外周に竪穴住居が取り囲む規則性を持っている。遺構の中でも竪穴住居群の重複が著しく何代にも渡ってこの集落が維持されたことを示している。



1. 竪穴住居跡

5m 前後が平均の大きさの円形の平面形

一般的に住居中央部床面に地床炉または石囲炉を囲んで 上屋を支える4本の支柱穴があり、壁側に小柱穴が巡る壁面の一部に出入り口と考えられる小穴または溝状の施設を有する。

2. 掘立柱建物

倉庫的な機能を有する施設と考えられ、主流の4本柱や6本柱の組み合わせが見られる。

一般に4本柱では一辺が3~4mの方形を呈する。

6本柱では長軸4.8~6.4m 短軸3~5.1mの長方形または六角形の形状をなしている。

これら遺構の柱穴径は0.3m~1m 規模で円形に彫られている。

3. 土坑

大きさ径1m前後の円形の平面形 フラスコ型 または箱型の断面形。クリ・トチ・クルミなど堅果類が検出される土坑の存在から貯蔵穴と見られる。

一部の土坑の壁に赤変したものが見られ、長期保存のため、土坑を乾燥処理していた可能性がある。

4. 土壌墓

集落の中心部 東西に14mの距離を置いて約15m範囲内にそれぞれ 65基・55基からなる墓域が楕円状にある。土壌墓の幾つかには赤色土壌を散布したものが見られる。

土壌墓から出土した遺物は 人骨と副葬品である石製の玉類で人骨は1例

石製の玉類の総数290個 材質はほとんどがヒスイで 検出された土壌墓は20基と2割程度

5. 炭化米の出土

また、縄文後期末とされる竪穴住居跡で7粒 縄文の炭化米(重要文化財)が出土。“日本最古のコメ”であり、稲作には不適と考えられていた東北最北端の八戸地方で、しかも、縄文時代の後期にコメ作りが行われていた可能性を議論されるが、まだ確認されていない。



図2 環状集落跡 (縄文時代後期後半)

風張遺跡 縄文後期の環状集落配置



出土した炭化米 (顕微鏡写真)



遺跡の中心部 白線部は墓



竪穴住居跡群



掘立柱建物跡



炭化米が出土した竪穴住居



トチの実を貯蔵した土坑



土坑墓群

上記のごとく 風張の縄文後期集落は真ん中に集団墓地、掘立柱建物群、竪穴住居群が環状に配置されていたようで 縄文集落の特徴をよく表した縄文後期の代表的な環状集落である。そして、新井田川を挟んで反対側の丘には縄文晩期の是川遺跡など、数多くの縄文遺跡が新井田川流域にあり、是川遺跡の形成を含め、この流域の人の移動を考える上で極めて貴重なものである。

● 出土遺物

出土した遺物は、土器 131、土製品 177、石器 55、石製品 301 の計 664 の遺物。附として炭化米 7 粒である。

1. 土偶は、「合掌土偶」を代表とし、「腕を組む土偶」など、縄文時代後期後半の風俗を知る上で貴重なものが多い。
2. 土製品は、スタンプ形土製品と称されるもので、形などその多様性が注目されており、青森県東部の縄文時代後期の変化を考える上で重要である。
3. 土器は焼成前に胴下半部に孔を穿つ壺形土器・筒形土器・香炉形土器などが出土し、美術工芸的に優れた亀ヶ岡土器の成立の前段階を知る上で貴重なものである。



土器 (1)



土器 (2)



土偶



スタンプ型土製品



玉類



耳飾



合掌する土偶



出土状況



腕組する土偶



出土状況

八戸是川・風張遺跡出土 土偶